

## Ⅳ. 大学連携の試み

# 大学連携「学びの杜」の取り組み

山田 孝・鶴見 剛\*  
大学連携研究部会

**【抄録】** 平成14年度より開始した「学びの杜」は、「新しい自分の発見」という理念のもとに、大学での最新の研究や幅広い生徒の学びの要求から開催してきた。熱心に参加する生徒もおり、教科の授業以外の新しい学びの場として定着してきているように思われる。こうした、「学びの杜」の取り組みの中で、単位化の要望も高まっており、大学連携研究部会では、「学びの杜」の単位化について検討を進めることになった。この論議の中で、中等教育研究センターと共同でTAを配置して、討論とレポート指導を取り入れた講座の構成を試験的に実施することになった。

**【キーワード】** 大学連携 最先端学問 自分の発見

### 1. 附属学校での論議

#### (1) 校内研究グループでの論議

14年度の「学びの杜」実施の反省と単位化の問題について、今年度スタートした大学連携グループで論議を開始した。単位認定にあたっては、講座回数や講座の系統性から現状では単位認定は無理ではないかとの意見がだされ、単位化の方向についての提言を行った。

提言では、「学びの杜」は生徒の幅広い関心や興味の喚起の立場からも今後とも必要であり、単位化にあたっては講座の系統性と回数、内容についての何らかの指導を必要とすることを提起した。

### 2. 中等教育センターの取り組み

#### (1) TA（ティーチング・アシスタント）の配置

研究グループでの論議を受けて事前指導・レポート指導・ディスカッション等を実施して単位認定の資料とするための、TA（ティーチング・アシスタント）を中等教育センターから派遣してもらうことになった。また、系統的な講座の開講のために中等教育センターから講師依頼し、理系文系に偏らない講座配置と系統性についても考慮することになった。

### 3. 「学びの杜」実施経過

7月15日（火）『「9・11テロ」とアフガニスタン、イラクの戦争－いま何が問われているか－』  
佐々木雄太 先生 名古屋大学副総長  
名古屋大学大学院法学研究科

8月27日（水）「電脳解剖」 夏休み講座  
稲垣康善 先生

愛知県立大学（前名古屋大学工学部）

8月28日（木）「人の見方や人との関わり方」

夏休み講座 オープンスクール企画

吉田俊和 先生

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

※鶴見さんが参加

10月11日（土）、10月25日（土）、11月8日（土） 数学

アゴラ 「学びの杜」

寺西鎮男 先生

名古屋大学大学院多元数理研究科

12月15日（月）「＜恋愛＞を哲学する」

短縮中の午後 谷本千雅子 先生

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

16日（火）「民主社会の光と影－古代ギリシア

から考える－」短縮中の午後

周藤芳幸 先生

名古屋大学大学院文学研究科

3月13日（土）「体験！現代美術の世界

PART 2 “かたちってなーに？”」

神田每実 先生

愛知県立芸術大学

3月17日（水）「建築の見方：用・強・美・共・公」

小松 尚 先生

名古屋大学大学院環境学研究科

※鶴見さんが参加

3月18日（木）「図書館と情報収集」

伊藤義人 先生名古屋大学図書館長

名古屋大学大学院工学研究科

※鶴見さんが参加

### 4. 成果との課題

平成15年度も9回「学びの杜」を開催することができた。大学との連携の一環として昨年度から実施してようやく生徒や教師の間にも定着し、生徒の学びの窓口を広

※名古屋大学教育発達科学研究科  
教育社会学研究室 D1 鶴見 剛

げることによって貢献してきているように思われる。今年度一年、単位化の試行に取り組んできたが、中等教育センター、TAの鶴見さんの協力によりディスカッション・レポートの指導にも乗り出すことができた。一方で、レポートを課すことにより生徒の参加者の中にも躊躇するものが出てきたのも事実である。単位化の問題と参加者数との兼ね合いも今後検討する必要が出てきた。

(大学連携研究部会 山田 孝)

## 2 “学びの杜” 講座の運営に関する実践レポート

この度の“学びの杜”講座は、単位認定を視野にいれた初の試みとして、グループ・ディスカッションとレポート課題を導入した。これは、前半は従来通り講義を行い、後半は生徒同士の意見交換を通して、生徒が自らの学びのプロセスについて内省的に思索することを促進する新しいプログラムを開発するものである。

### 論理的根拠：

これまでの講座では、担当講師による講義の後、生徒に簡単な感想とアンケートをお願いするのみであった。これでは生徒が“学びの杜”の取組みの中で何を、どう監察し、どのように学んだかといった学習過程の分析が困難であるだけでなく、生徒本人にとっても情報を受けとるだけの従来型教室講義の延長になってしまい、学びの範囲が限られてしまっていた。

今回は試験的に、従来型講義と学習者中心教育を組み合わせた新しい講座スタイルを導入した。生徒同士の意見交換を促進するとともに、講師と生徒、そして保護者まで巻き込んだ全員参加型共同学習の場を提供することが目的であった。生徒は講義後、グループ・ディスカッションおよびレポート課題に取り組むことにより、講義内容の理解だけでなく、「自ら考え、自ら表現する」体験を通して、考察力と自己学習能力を向上させることが期待される。講師は上の立場からでなく、生徒や保護者と同じ視点で考え、議論することで、参加者それぞれの立場やバックグラウンドを認識し、参加者のニーズやレベルに見合った情報を提供することができる。保護者も親という立場から離れ、生徒や講師と共に考えることにより、生涯学習の一貫としての“学びの杜”講座の意義を発見することができる。この「考察」と「共学」を視野に入れた講座システムは、参加者全員が年齢や立場の壁を超え、個々の意見や価値を尊重しつつ、公平に議論を重ねる大切さと、それによる学習成果の意義を、それぞれの立場から判断できる場を提供するものである。

**対象学年：**中学1年生から高校3年生まで

**時間枠：**2時間（講義60分；グループ・ディスカッション30分；発表&質疑応答30分）

【レポートは後日提出。所要時間は約2時間と

仮定】

**運営手法：**チームビルディング、レクチャー、グループ・ディスカッション、発表、アセスメント、レポート

8月27日(水) 講座テーマ「脳の解剖」 稲垣康善先生

**参加人数：**高校生 中学生 保護者

**使用教材：**小冊子、黒板

**達成目標：**

- ・ 電子計算機の歴史認識
- ・ 電子計算機のしくみと2進数表示の理解
- ・ 論理関数の理解
- ・ 論理回路の設計

**事前打合せ：**

稲垣先生との事前打合せでは、対象者人数、学年、男女比、グループ割り、大まかな進行スケジュール、講義内容の確認などを行った。テーマと内容の難度が高すぎるのではとの危惧もあったが、配布資料も用意していただけたことだったので、たとえクラス内での理解が不十分であったとしても、後に生徒自身で復習できると考え、テーマを維持した。先生が付属高校の卒業生でいらっしゃることもあり、始めの10分ほどで御自身の付属校生時代の回想や想い入れなどをお話いただき、生徒の興味を引く作戦を考えた。先生の講義の後、TAが中心となってグループ・ディスカッションを運営する予定であったが、先生も時間をさいてご参加いただけるとのことだったので、後半も先生にリードしていただくことにした。話し合いの結果、生徒を4つのグループに分け、2グループずつ2種類の課題に取り組ませることにした。課題は先生に用意していただいた。保護者はクラス後方に座っていただき、可能であれば保護者同士でグループを作り、課題に取り組んでいただけるよう打診することとした。以下講座構成。

9：50-10：00 グループ生徒同士自己紹介（チームビルディング）【担当：鶴見TA】

10：00-10：05 講座趣旨および講師紹介【担当：山田先生】

10：05-11：00 講義【担当：稲垣先生】

11：00-11：10 休憩

11：10-11：40 グループ課題ワーク【担当：稲垣先生、鶴見TA】

11：40-12：00 グループ発表および質疑応答【担当：稲垣先生、鶴見TA】

12：00-12：10 レポート説明【担当：鶴見TA】

8月28日(木) 講座テーマ「人の見方や人との関わり方」

吉田俊和先生

**参加人数：**高校生 中学生 保護者

**使用教材：**講義アウトラインプリント、黒板

**達成目標：**

- ・ 人の見方に関する心理メカニズムの認識と理解
- ・ 人との関わり方に関する心理メカニズムの認識と理解
- ・ より良い人間関係を築く方法を模索する
- ・ 今後自分はどうするべきかを考える

**事前打合せ：**

吉田先生の講座には付属学校のオープンスクールが重なり、約20名の学外生徒および保護者が参加するということで、先生も講義内容をどこまで広めればよいのか苦心されていた。基本的には学内の中・高生にターゲットを絞ってお話いただけるようお願いした。この講義は身近な話題が中心で、事前の基礎知識は必要ないため、グループ分けも前日に比べれば配分しやすかった。講義後のグループ・ディスカッションについても、先生からそれぞれの経験をグループ内で発表するのがいいのではとの助言を頂いた。以下講座構成。

10：10-10：20 グループ生徒同士自己紹介（チームビルディング）【担当：鶴見TA】

10：20-10：25 講座趣旨および講師紹介【担当：山田先生】

10：25-11：30 講義【担当：吉田先生】

11：30-11：40 休憩

11：40-12：00 グループ・ディスカッション【担当：吉田先生、鶴見TA】

12：00-12：30 グループ発表および質疑応答【担当：吉田先生、鶴見TA】

12：30-12：40 レポート説明【担当：鶴見TA】

**事前準備品：**

- ・ 座席表——山田先生から参加者リスト（エクセル）をいただき、それを元にパワーポイントで座席表を作成した。高校生と中学生、また男女を均等に配分した。27日、28日の講座に出席する生徒は両日とも違うメンバーとグループになれるよう配慮した。
- ・ レポート課題プリント——今回は「発見」と「考察」をテーマに構成した。感想文ではなく、自己の発見についての考察と思索を深めるプロセス重視のレポート作成を、4つのポイントを順にカバーすることにより作成できるよう考慮した。
- ・ ネームボード——生徒一人一人が着席した際テーブル上におけるネームボードを、厚手の紙を三つ折にして作らせた。これによりグループ・ディスカッションの時お互いを名前呼び合えると同時に、講師も講義中に生徒を指名することができ、インタラクティブな講座運営を可能にした。
- ・ 講義冊子——稲垣先生からは事前に受け取り、参加者人数分のコピーを作成した。吉田先生は当日

御自身でコピーを持参された。

**注意点／反省点：**

- ・ 夏休み最後ということもあって、予約人数と参加人数にズレがおおきかった。事前に参加予定者にハガキを出すなど、フォローが必要であった。
- ・ グループ分けは、当日参加者が出そろってから行うべきであった。特に稲垣先生の講座では、理科系に強い生徒が何人いるのか事前に確認できなかったため、理解の早いグループと遅いグループが分かれてしまった。クラスのはじめに、テーマに関する事前知識や興味を挙手にて示させ、知識のある人材を均等に割り振るとグループワークがよりスムーズになると考えられる。
- ・ グループ・ディスカッションの間、TAは積極的にグループに加わり、必要であればディスカッションの方向性を示唆する必要がある。その際、椅子に座るか、しゃがむなどして、生徒と同じ視線で議論することが大切である。
- ・ レポート課題の説明の際、このレポートは「講義ノート」ではないことを明確に伝える必要がある。“学びの杜”における学習は、クラスルームに一步入室したその瞬間から始まる。「発見」は講義内容からだけに限るものではなく、生徒同士のやりとり、教室内の雰囲気、発表や質疑応答、ひいては休憩時間中のトイレにおける友人同士の会話からでも、それが「発見」であればレポートになる。重要なのは、発見のプロセスであり、その自己認識の過程を考察し、ロジカルに分析することである。